葦毛（いもう）通信

平成 26 年 3 月 11 日
豊橋市文化財センター
TEL：0532-56-6060
No. 9

1、平成 25 年度中間報告ー4

平成 25 年度の作業も残り４回となりました。予想通りミズゴケの処理に手間取っています。

Ｇ地点の表土剥ぎは、昨年度の表土を剥いだところの続きを上流の湧水線まで行いました。木を伐った範囲はもっと広くありますが、とてもすべての表土を剥ぐことはできません。当面この状態で経過観察することにします。試掘調査で掘った穴は、最近雨が多く常に満水状態です。しかし、下から水がわき上がっているのではなく、止水状態です。今後晴れの状態が続いて水が抜けてしまうのか、あるいは満水のままなのかを経過観察し、湧水の状態を調べます。また、３月４日には、この穴に水棲昆虫が来ていました。写真は撮れませんでしたが、大きさは３～４㎜ほどで、黒い半球形をしており、ガムシの仲間かもしれません。

Ｇ地点の試掘穴（西から）

Ｈ地点のミズゴケ除去作業と乾燥台（南から）

Ｈ地点はミズゴケの除去を行っています。ミズゴケは厚い所で 30～40 ㎝あり、これを除去すると黒色土がありました。深い所で 30 ㎝ほどあり、足を取られるほどのぬかるみ状態になっています。作業を行う前は水の流れは全く見えませんでしたが、ミズゴケを取っただけで水があふれ出してきました。まず、ミズゴケだけを除去し、黒色土からどのような植物が発芽するのかを確認します。

湿地の中に乾燥台（金網を張って脚を付けた木枠）を置き、次回の作業までの一週間乾燥させ、ムカシヤンマのヤゴやヒメタイコウチの幼生が湿地に逃げ出せるようにしています。

Ｉ地点南東隅は表土を剥ぎました。Ｂ地点からの水がスムーズに流れるように一部の表土を剥いでいます。木道の下も表土を剥ぎました。発芽していたショウジョウバカマは他の場所に移植しています。

Ｉ地点南東隅の表土剥ぎ（西から）

Ｋ地点は、東側のネザサ部分の表土剥ぎが終わりました。幅２ｍ、長さは約５ｍでネザサの根を除去しました。厚さは最大で 10 ㎝ほどあり、絡まってマット状になっています。スコップで四角く切り、唐鍬で引っ張るとはがれてきます。下は礫層です。写真の中央あたりから水が出てきて、地表面を流れ下っています。豊富な水が地表面を流れていた所に表土が溜まり、ネザサが繁茂して乾燥化していたことが分かりました。表土除去の段階でハルリンドウの芽が出ているのが分かったので、調査区の隅に移植しました。今回は、ネザサの根を除去するだけで、表土層をすべて除去することは行っていません。中央から下には黒色の土が薄く残っています。この中にも埋土種子があると思われますので、このままどのような植物が発芽するのかを経過観察します。

Ｋ地点東側のネザサ部分（北から）

調査区の両側は昨年と同様にネザサの群落になると思われます。調査区内の下半分（下流側）はやや土が残って水量が多いところなので、モウセンゴケやミミカキグサが発芽し、やや乾燥気味で土が少なく礫が出ている上流部分は、シラタマホシクサやミカヅキグサが復活するのではないかと予想しています。土の厚さ、水量等の地質条件によって発芽する種が異なってくると予想されます。

この他には、小さな島状部分の表土を除去しています。今後も作業を続け、島状部分をできるだけ元の裸地の状態に戻す予定です。

2、春の芽吹き

アズマヒキガエルが産卵しました。毎年この時期にまとまった雨が降ると一斉に出てきて産卵します。２月 27 日と３月２日にまとまった雨が降ったので、産卵したのはどちらかの雨の直後でしょう。３月４日の植生回復作業の時にはたくさんの卵がありました。午前中は大勢の人が作業を行っており、姿を見ませんでしたが、作業が終わった昼過ぎには、あちこちで鳴き声が聞こえ、産卵した水溜りの周辺に集まっていました。周辺の草むらに隠れていたものが、人がいなくなったので出てきたものと思われます。少なくとも 20 匹近くはいたと思います。

アズマヒキガエルと卵

アズマヒキガエル

ショウジョウバカマはピンク色の花芽をつけ、ハンカイソウやミカワバイケイソウも芽を出しました。ミカワバイケイソウは、昨年はハズレの年で、ほとんど花をつけませんでしたが、今年は５月の連休頃には花を咲かせてくれるものと期待しています。

湿原はもう春です。植生回復作業の影響は最小限にするように配慮したいと思います。

ショウジョウバカマ

ハンカイソウ

ハルリンドウ

ミカワバイケイソウ

3、「スカスカの森」

葦毛通信７号で紹介した岸由二『奇跡の自然』2012 八坂書房には、著者の岸さんと脳科学者の養老孟司さんとの対話が掲載されていました。その中で、興味深い提言がありましたので紹介します。それは、「スカスカの森」ということです。生物多様性のあり方を考えるヒントになると思います。

養老さんが少年期を過ごした 1950 年代の鎌倉の鶴岡八幡宮の裏山は、スカスカの松林だったそうです。それが現在は常緑広葉樹に覆われたいわゆる鎮守の森と呼ばれる深い森になってしまいました。

岸さんが少年期に行った横須賀の武山というところもスカスカの森でしたが、人の手が入らず伐採や枝おろしを行わず、今は原生林と思えるようなうっそうとした森になっているそうです。しかし、当時のそのスカスカの森にオオムラサキやクワガタがいて、ゴマダラチョウは手でつかめるほどいたそうです。

つまり、スカスカの森は里山の森として人間が手を入れ続けてきた森です。燃料にするために木を大量に切っていた森で、人間の収奪によりぎりぎりの状態で保たれていたのかもしれません。しかし、昆虫にとっては、そのような「**疎林**」という環境が好都合だったようです。

養老さんは、昆虫採集でも有名ですが、虫がたくさん捕れるのは落葉樹の森で、広葉樹の森は虫があまり捕れないそうです。それは、常緑広葉樹の暗い森の林床部は地下と同じで、日が当たるのは樹冠部のみで、まさしくそこが地表で、そこに花が咲き、動物や虫が棲んでいるそうです。

考古学に関する提言では、縄文時代の遺跡が北日本や東日本に多く西日本に少ないのは、西日本は照葉樹林中心で真っ暗な森で生き物があまりいなかったからだということです。確かに、縄文時代の遺跡は中部地方の山間部や北陸地方から北の地方に多く、東海地方から西には少ないのは事実です。大きく見れば、落葉樹の森と照葉樹の森に対応しているようです。

岸さんの話では、住んでいた団地でオオムラサキがいなくなったと嘆いていたら、５階に住んでいる人から、樹冠部によく来ていることを教えられたそうです。樹冠部は林の下からは見えません。たくさんの昆虫がいたとしても、見ることができないのでいなくなってしまったと思い込んでいたということです。

樹冠部に関しては、多様な生物が棲んでいるのは熱帯雨林のような環境で、日本のような温帯の森は大したことはないという意見の人もいます。しかし、私も同じような経験をしたことがあります。

豊橋市東部に石巻山という山があります。この山の頂上部は標高 358m で、「石巻山石灰岩地植物群落」として国指定天然記念物に指定されています。山頂は巨大な石灰岩の露頭になっており、頂上に立つと、すぐ下には照葉樹林の樹冠部を間近に見ることができます。その樹冠部におびただしい数のチョウが乱舞しているのを見たことがあります。明らかに数百頭という数で、あるいは千を超えていたかも知れません。アゲハチョウほどではありませんが割と大きなチョウでした。その時は写真に撮れなかったのでチョウの種類はわかりませんでしたが、森の中を歩いて頂上を目指していた時には全く気づきませんでした。

また、上空を大型のトンボが飛んでいるのを見たことがあります。石巻山の頂上のさらに上空で高速で飛び回っていました。写真には撮りましたが、あまりに遠かったので不鮮明で種類まではわかりません。樹冠部を直接見ることができる機会はあまりないかもしれませんが、想像以上に多様な生物がいるのではないでしょうか。

葦毛湿原でも、ハンノキの樹冠部ではミドリシジミが乱舞しているかもしれません。小鳥も樹冠部を飛び回っていることでしょう。葦毛湿原でも、森の樹冠部を間近に見ることができれば、想像もできなかったような多様な生物の営みを見ることができるかもしれません。

石巻山山頂から撮影したトンボ（2012 年 7 月 17 日撮影）　　拡大したトンボ